

- (7) 渡瀬昌忠氏「万葉集における人麻呂歌集の採録——略体・非略体の認定をめぐって」(『万葉』六十二号)。  
 (8) 諸説については桑川定一氏「人麿歌集庚辰年考」(『国語国文』昭和四十一年十月)参照。  
 (9) 前掲論文。  
 (10) 土居光知氏「比較文学と万葉集」(万葉集大成7)。  
 (11) 渡瀬昌忠氏前掲注(7)論文など。

## 人麻呂の『歌集』

——歌の分類をめぐって——

渡 瀬 昌 忠

### 一、人麻呂撰の『歌集』

万葉集に記された書名「柿本朝臣人麿(之)歌集」は、人麻呂の『歌集』であって「人麻呂集」ではない。隋書や旧唐書の経籍志では、「人名集」と呼ばれるのは別集(個人集)に限られる。それは多く後人が先人の作品(さまざまな文体の)を個人別に集めたものである。世にいわゆる「人麻呂集」なる名称がそうした別集を意味するならば、それは正しい呼称ではない。(巻十三に「柿本朝臣人麿之集」とある唯一例は、「柿本朝臣人麿之歌集」の変形にすぎない。)

「柿本朝臣人麿(之)歌集」という書名は、「山上(臣)憶良(大夫・臣)類聚歌林」が山上憶良の撰した『類聚歌林』の意であると同じく、柿本人麻呂の撰した『歌集』の意であった。それは、隋書経籍志の「総集」に、例えば「詩集五十卷、謝靈運撰」「賦集九十二卷、謝靈運撰」などあるのに類するもので、これに倣って記せば「歌集〇卷、柿本朝臣人麻呂撰」とあるべきものであった。隋書経籍志には、総集(多人数の作品の集)として、『詩集』『賦集』のほか、「詔集』『碑集』『論集』『策集』『七集』等々の文体別のものが相当にある。人麻呂の名を冠する『歌集』は、

そうした文体別の総集の影響を受けて成立し名づけられた「歌」の総集であったと考えられる。

したがって、略称としても、「人麻呂集」ではなく、憶良の類聚歌林が「憶良が歌林」（前麗景殿女御歌絵合）と呼ばれたように、「人麻呂が歌集」または「人麻呂歌集」と称すべきものである。

日本の『類聚歌林』もその名から察せられるように、多くの「歌」を分類して編集したものであったが、中国でも、文体別の総集には、さらに内容分類が行なわれていたはずである。それは、『文選』や『文館詞林』のような、多くの文体を類聚した総集の内部において、「賦」「詩」などの各文体ごとに、さらに内容による細分編纂のなされていることから、容易に推測される。

そして、人麻呂歌集が人麻呂によって編纂された「歌」の総集としての『歌集』であったと、わたしの言うのも、長流・契沖以来指摘されてきた人麻呂歌集に他人作が相当あるという事実のほかに、人麻呂歌集の内部に歌の分類のなされていた形跡が認められるからである。（本節の詳細は、拙稿「柿本人麻呂の『歌集』——その書名について——」（大東文化大学東洋研究所『東洋研究』30「昭48年3月」）に述べた。）

## 二、略体歌と非略体歌

人麻呂歌集所出の歌の書式には、「助辞を不書して字数甚少く書なせし」（賀茂真淵）「略体」（阿蘇瑞枝氏）のものと、「常体に助辞をも書し」（真淵）「非略体」（阿蘇氏）のものとの二種類がある。その略体のものを、契沖（代匠記）のように「簡古ニカ、レタリ」と見るか、真淵（考）のように「奈良人のから歌めきて書なせし」ものと見るかは、こんにちにおいても、論の別れているところである。が、この書式の二種は、人麻呂歌集の原本以来のものと思われるのであって、もはや、略体歌と非略体歌との区別を無視しては、人麻呂歌集の成立問題は決して解けないであろう。

しかしながら、最近では、どうやら両者を切離して見すぎるきらいがある。両者は明確に区別されなければならないが、また両者を結合させ関連させる視点が確保されなければならない。なぜなら、人麻呂歌集の略体歌と非略体歌とは、歌の場、筆録、分類などの上でそれぞれの独自性を示しながらも、その各段階において互いに強い関連性を有しているからである。したがって、人麻呂歌集を全的に理解するためには、この両者の有する対立相違の面と共存共通

の面との両側面を、総合的に把握することが必要なのである。

書物としての人麻呂歌集の原本には、略体歌の部分と非略体歌の部分とが存在したが、両者は、いずれも人麻呂歌集原本の部分である点において共通する。人麻呂歌集を解体採録した万葉集撰者が、略体歌と非略体歌とを区別せず、ひとしく人麻呂歌集所出歌として扱っているのは、そのためである。

人麻呂歌集原本の略体歌と非略体歌との両部分のもつそれぞれの独自性と相関性とは、最終的には歌の分類の上に現われていた。以下そのことを具体的に述べてみたい。

### 三、季節分類（非略体歌）

人麻呂歌集に季節分類が行なわれていたのではないかということとは、石井庄司氏（『古典考究万葉編』七四ページ）、武田祐吉氏（『国文学研究柿本人麻呂攷』八四ページ）によって指摘されていた。それは巻十および巻九の雑歌部に採録された人麻呂歌集歌について言われたものであったが、この季節分類は、人麻呂歌集原本の非略体歌部分に施されたもので、非略体歌は季節不明歌群と春・秋（七夕を含む）・冬三季の季節歌群とに分類されていた、と考えられる（拙稿『国学院雑誌』昭37年7・8月号）。これについては阿蘇瑞枝氏からの批判を得（『国語と国文学』昭41年3月号、『柿本人麻呂論考』所収）、その後さらに考察を深めることができた（『文学・語学44』『万葉67』ほか諸拙稿）。

それによると、非略体歌の季節分類は、各季にいちじるしい歌数の片寄りがあると共に、また独自の季感に基づくものであった。それらは、皇子を中心とする季節行事という、独自の歌の場において形成されたものであるらしい。

巻八の原資料となった「大伴宿禰家持之歌集」とも称すべき季節歌集は、その非略体歌の季節分類を規範として編まれたものであり、さらにそれを土台にして形成された現巻八とそれに続く巻十とにおける四季分類は、したがって、人麻呂歌集非略体歌の季節分類から出発したものだと言える。

もとより、四季の観念は中国伝来のものであり、古代日本の季節分類の成立にその影響の大きかったことは、何人も否定しえない。歌の季節分類ということも、玉台新詠や楽府詩集の類に見える四時歌、あるいは北堂書鈔や芸文類聚のような類書に見られる「歳時部」の四時分類、こうした具体的な先例と無縁であったはずはない。しかし、日本

文学史上において初めて人麻呂歌集に現われた季節分類は、かなり独自の片寄りと日本的内発的な特性とを有するものであった。

非略体歌の分類としては、この季節分類が最も大きく最も重要なものであった。というのは現巻九雜歌所載の季節歌群（一六九四〜一七〇九）一六首と、現巻十の春・秋・冬の雜歌部の季節歌五二首との合計六八首は、非略体短歌の現存一三二首（巻九の範圍を広く解して）に対する五一・五パーセントに当たり、非略体歌が季節の明不明によって分類されたと考えるに十分な分量だからである。

なお、季節不明歌群について言い添えておきたい。万葉集巻七雜歌の人麻呂歌集所出歌のみに「詠天、詠雲、詠山、詠河、詠葉の順序」があり、これが「支那式類聚の排列法と一致する」ものであることを武田祐吉氏（『上代国文学の研究』三八九ページ）が、はやく指摘された。そして、非略体歌に季節分類があったという小見を支持される吉田義孝氏は、この武田説の指摘を、非略体歌の季節不明歌群の分類に関するものとして受けとり、「巻七所在非季節歌が、その原本においてすでに整理分類をへていたことは、同じ非略体歌の季節歌との関連からみて、容易に推定が可能であろう。」（『文学』昭和四年六月号）と言われた。

しかし、すでに後藤利雄氏の論じられていたように、巻七雜歌の出所不明歌において、「詠露」が天部を離れて地部にあるのは、露が地上に置くからであり、「詠井」が「思故郷」と「詠倭琴」との間にあるのは、井が人為の加わったものだからであって、「巻七の雜歌は天、地、人」という支那式排列法によるもの（『人麿の歌集とその成立』一五ページ）と言うべきであった。巻七雜歌内の人麻呂歌集歌は、巻七撰者の「天地人」分類の体系の中に組み込まれた部分にすぎない。それは、巻七譬喩歌の人麻呂歌集略体歌が、巻七撰者の譬喩歌分類の基準によって略体歌の寄物歌群中から抜き出されてきたものであることと揆を一にする。巻七の雜歌と譬喩歌とに存する分類配列の順序は、共に巻七独自のものであって、人麻呂歌集原本のものではなかったのである。

巻九に現存する人麻呂歌集の季節不明歌群の状態から推しても、「詠物」による分類は人麻呂歌集の原本には施されていなかった、と考えられる。

そのことは、略体歌においても、以下に述べる寄物分類のほかには、「正述心緒」の歌群内には分類配列らしいも

の顯著でないことと、対応するであろう。

#### 四、寄物分類（略体歌）

人麻呂歌集原本の略体歌には、寄物陳思の「物」による分類（寄物分類）が施されていた。その原形を推測させるのは、巻十一の冒頭近くにある「寄物陳思」の人麻呂歌集歌群（二四一五～二五〇七）である。この九三首中には非略体歌と見るべき歌が九首（二四一五、二四三四、二四四〇、二四四九、二四五〇、二四六五、二四八三、二四八四、二四九〇）あるから、現巻十一にある寄物分類の施された略体歌は八四首である。なお、このほかに、現万葉集巻七の譬喩歌の冒頭一四首、巻十の春相聞の冒頭七首、同じく秋雑歌七夕歌中の一首（二〇三二）、同じく秋相聞の冒頭五首、同じく冬相聞の冒頭二首、巻十一の問答の後半四首（二五一三～二五二六）、巻十二の冒頭部の寄物陳思一三首、以上の四巻七箇所採録されている四六首の略体歌は、原本においては巻十一所在の寄物歌群と同じ歌群に分類配列されていたと考えられる。したがって、寄物分類の施されていた略体歌群は合計一三〇首を数えることになる。略体短歌総数一九六首として、その六六・三パーセントにあたる。略体歌の分類としては、この寄物分類がやはり最も大きく重要なものであった。

では、巻十一所在の略体歌群における寄物分類はいかなるものであったか。現巻十一のその部分に寄物による配列の存することを最初に指摘したのは、契沖（代匠記）であったが、武田祐吉氏の『上代国文学の研究』（大正10年3月）にいたって、寄物分類の「順序」と「種類」とが明確な研究対象として取り上げられ、次のような、個々の寄物を統括する部門の名称と順序とが明示されるようになる。これを画期として展開する諸研究の、巻十一人麻呂歌集の分類に対する部門把握の仕方を一覧すると次のようになる。

- ① 武田祐吉氏「神祇・地・天・植物・動物・器物」（『上代国文学の研究』）
- ② 福田嘉樹氏「神・地・気・天・植・動・器・衣・雑」（『万葉集講座6 編纂研究篇』）
- ③ 鴻巣隼雄氏「神祇・天地・地象・天象・植物・動物・器占」（『国語と国文学』昭25年1月号）
- ④ 次田真幸氏「神祇・地象・天象・植物・動物・雑・器物・衣服」（『お茶の水女子大学人文科学紀要8』）

⑤後藤利雄氏「神祇・天地(天地、地、天、植物、動物)・人工物」(『人麿の歌集とその成立』)

まず、寄物分類の最初に「神」(二四一六～二四一八)を置いたと見るのは諸家の一致するところ。そして、これが他の巻七、十二、十四等の諸巻にはもちろん、同じ巻十二でも出所不明歌には見られないところで、人麻呂歌集に特有のものであり、日本的な独自性を示すものであること、はやく武田説の指摘がある。

「神」に続く一首(二四一九)の「天地」は、単にその一首の寄物にとどまらず、天地部という統括部門の存在を示すものであること、後藤説のとおりである。

「天地」部の中で「地」(二四二〇～二四四八)が「天」(二四五一～二四六四)の前に置かれたのは、人麻呂歌集独特の配列である。それは、神を祭る場所が「地」の部の「山」「川」「海」「沼」等であったからであろう。「神」を先頭に立てた配列と、これは関係がある。

「植物」(二四六六～二四八九)と「動物」(二四九一～二四九三)とを天地部の中に包括しようとする後藤氏の考えは、うべなえる。植物や動物は、天地自然の間に存在するものであり、人麻呂歌集の場合、「神」「天地」「人」のいずれに層するかと言えば、「天地」に層すると答えてよい。事実、「天地」に続けて「植」「動」は置かれているのである。

しかし、巻十四の寄物陳思歌のように、その配列順の若干異なる巻があり、また中国文献でも、辞書の爾雅は「天」「地」に続けて「植」「動」を置くが、類書の北堂書鈔や芸文類聚や初学記はすべて「人」部に続けて植物・動物を置く、という違いがあるから、それらとの比較の便宜を考えて一往これを括弧でくくって置くことにする。

「動物」の部は、武田説では、鳥(二四九一・二四九二)、獸(二四九三)、虫(二四九五)、人種(二四九六・二四九七)であり、動物の獸と虫との間に船(二四九四)のあるのは「断じて摺入である」とされた。しかし、動物部は獸(二四九三)までとする次田説が妥当である。そして、船(二四九四)以下最後までを、後藤氏が、「人工物部」、正確には「人工人為物部」とでも称すべきものとされたのは、卓見であった。

それは、「天地人」の「人」の部としてよいであろう。その寄物は「船、繭、木綿、夜声、刀、櫛、鏡、枕、衣、弓、占」の順に並ぶ。いずれも古代人の人間生活そのものの中に存する呪的事物であった。そして、ここには、「夜

声（二四九七）や「占」（二五〇六、二五〇七）のような「人為的な物は人麻呂集以外に見当たらない」と後藤氏の言われるとおりの、人麻呂歌集の「人」部の分類の独自性が存するのである。

以上によって、人麻呂歌集の略体歌の寄物分類には、

神・天地（植・動）・人

という部門の立てられていたことが認められるであろう。

こうした分類法が「支那の書物から学んだもの」（『上代国文学の研究』）であり、中国伝統の「天地人」三才による万象分類の影響下にあったものであることは、明らかである。

この「天地人」分類を最も典型的に見せるのは、卷七の雑歌部であって、ここでは、

天・地（植・動）・人

と配列されている。この卷七雑歌の分類の「詠物」の配列に、初唐の芸文類聚における天部・地部などの事物の配列との類似を見いだされたのは土田知雄氏（『武蔵野文学』）であった。その配列の細部よりはむしろ、大きく「天地人」分類を取る点において、卷七雑歌は人麻呂歌集略体歌とともに、玉篇や芸文類聚と酷似する。

ただし、「植」「動」の位置には、玉篇や芸文類聚の「天・地・人（植・動）」との間に大きな相違があり、ことに人麻呂歌集においては「天地」の前に「神」を置いていた。

したがって、人麻呂歌集の略体歌は、芸文類聚の系統の分類法の影響を受けながらも、また独自に日本風の世界把握を見せた分類を有していたことになる。

芸文類聚の「天地人」分類に対して、爾雅では、大きく分けると「人・天・地（植・動）」の順となり、「人」部を先立てる。この爾雅によく似ているのは、卷十一の出所不明「寄物陳思」の

人・神・天・地（植・動）

や、卷十二の出所不明「寄物陳思」に見える

人・天・地（植・動）・神

であって、植物・動物を「地」に続けて置くところも共通である（その点は卷七雑歌も同じだが）。卷十一、十二では

「神」部を特立するところが日本風であるが、その「神」も卷十一では八首（二六五六、二六六三）と少数であり、卷十二のごときは末尾に一首（三一〇〇）のみだから、卷十一と卷十二における、出所不明歌の寄物分類は、爾雅の系統を模してなされたものだったと言えよう。したがって、岩城準太郎氏が「詠物、寄物の分類及び排列は、爾雅のそれを取つてゐる。」（『万葉集の異国趣味』、『国文学の諸相』、後『万葉学論纂』所収、二三六ページ）とされたのは、卷十一、十二の出所不明歌に関しては当たっているものと言わねばならない。なお北堂書鈔も「人・天・地」の分類である。

## 五、『歌集』の分類

非略体歌の季節分類は、中国伝来の四時歌や歳時分類の影響を受けつつも、なお未完成的、変則的であり、しかも独自に日本的な分類であった。そして、略体歌の寄物分類もまた、中国伝統の天地人三才による分類の影響を受けつつも、なお変則的かつ日本的な分類であった。両者の分類のもつ位相は、全く相ひとしい。

芸文類聚は「天・地・人」の分類を有すると共に、その「天部」と「地部」との間に「歳時部」を置いている。それは、

歳時部上——春、夏、秋、冬

歳時部中——元正、人日、正月十五日、月晦、寒食、三月三、五月五、七月七、七月十五、九月九

歳時部下——社（祖）、伏、熱、寒、臘、律、曆

以上の内容をもつ。これが天部の後、地部の前に置かれているのは、四時は天と地とによって生み成されるものだと考えられていたからであろう。ともあれ、歳時部と天部と地部とは緊密に結ばれており、「天地人」三才分類の一環として「歳時」はあったのである。北堂書鈔や初学記についても同様に言うことができる。

非略体歌の季節歌群における、春・秋・冬と七夕とがまさしく日本的歳時であり、略体歌の寄物歌群における神・天地・人が日本式三才分類である以上、両者は本来的に共存すべき性質のものであった。人麻呂歌集における季節分



類と寄物分類とは、本来一体であるべきものであった。

にもかかわらず、非略体歌の季節分類を三才分類から独立せしめたものは、何であったか。それは、皇子を中心とする季節行事という、呪術的儀礼的信仰的伝統に立つとともに文雅的文学的でもあらねばならぬ歌の場の要請であり、古代日本の世界的世界観における季節というもののいちじるしい重要性であったと考えられる。が、それが何に起因するにせよ、季節分類が寄物の三才分類と一体でありつつ、しかも三才分類から季節分類が独立しているという傾向は、これまた中国の影響と日本の独自性との相剋を物語るものにほかならなかった。

結果としては、人麻呂歌集という一つの書物の重要な二つの部分として、季節分類と寄物分類とは合体した。略体歌は非略体歌をかるうじて引き留めたのである。

かくして、人麻呂歌集は、非略体歌は季節歌群を中心に、略体歌は寄物歌群を中心に

非略体歌卷——略体歌卷

春・秋・冬——神・天地(植・動)・人

右のような分類体系を有していた、と考えられる。平安朝の成立ではあるが、類聚古集が

卷一	卷二	卷三	卷四	卷五六	卷七	卷八	卷九	卷十	卷十一	卷十二	卷十三	卷十四	卷十五	卷十六	卷十七	卷十八	卷十九	卷二十
春	夏	秋	冬	天・地	植・動	人	長	歌	(旋頭歌)									

右のごとく分類されていることは、注目される。憶良の類聚歌林は類聚古集と同様の分類構成を有するものでなかったか、と吉永登氏は推測された(『万葉21』)。もしそれが当たっているとすれば、人麻呂の『歌集』と憶良の『類聚歌林』とは、季節分類と三才分類とを主要な部分としてもち、分類の類似と共通とを有していたことになる。両者が共に撰者名を冠した総集であったとする私見は、強力な支えを得ることになる。いずれにせよ、『歌集』と『歌林』との関係や平安朝の諸歌集等の分類との関係が、いま一度問われねばなるまい。

人麻呂歌集の分類編集は人麻呂自身によってなされたものだ、とわたしは考える。その目的は何か。その文学史的意味は何か。これが今後に残された重要な課題である。